

当院における頸部膿瘍の臨床統計

中村 健大 小柏 靖直 守田 雅弘 茂呂 順久
佐藤 哲也 堤 知子 松田 雄大 永藤 裕
壺坂 俊仁 長井 恵一 大石 直樹 金谷 毅夫
山内 宏一 唐帆 健浩 武井 泰彦 甲能 直幸

杏林大学耳鼻咽喉科

【はじめに】 当施設は広範な西東京の耳鼻咽喉科救急医療の一翼を担っており、耳鼻咽喉科的救急疾患患者が多数来院し、緊急入院となる患者も多い。これらの救急疾患のうち、頸部膿瘍は重篤な病態を呈しやすく、強力な抗生剤治療を行っても重症化すれば縦隔炎、縦隔膿瘍、敗血症などを併発し、場合によっては致死的な転帰を辿り得る疾患である。

【目 的】 急性期は上気道閉塞などの呼吸不全によるリスクがあるが、血液ガス、喉頭内視鏡およびCTスキャン所見などより気管切開が必要かどうかなどの適切な判断が可能である。しかし、その後の経過で併発する縦隔病変や敗血症ひいてはDIC、腎不全などの全身的合併症の発症を未然に抑えることも非常に重要で、年齢などの素因も含め、どのような臨床所見を呈するものがより重症化しやすいかなどを検討することを今回の目的とした。

【方 法】 今回我々は、2000年1月から2008年12月までの過去約9年間に当科で入院加療を要した比較的重症の頸部膿瘍患者計46例（扁桃周囲膿瘍単独症例は除外）について臨床的な比較検討を行った。検討内容は、年齢、性別、既往歴・随伴症、喫煙歴、起炎菌、血液検査所見などに統計的解析を行うことを中心とした。

【結果および考察】 糖尿病などの全身的合併症があると予後が悪くなりやすいが、これらの検討結果に若干の文献的考察を加えての報告となった。